

大谷大学 2018

親鸞エッセイコンテスト

「ほんとう」って？

受賞作品集

募集要項

応募期間	2018年7月11日(水)～9月19日(水)必着	表彰	各部門から最優秀賞1名 ※賞状・副賞(図書カード3万円分を贈呈) 各部門から優秀賞2,3名 ※賞状・副賞(図書カード1万円分を贈呈) 各部門から新聞社賞1名 ※賞状・副賞(図書カードを贈呈) 奨励賞若干名 ※賞状・副賞(図書カードを贈呈)
募集内容	「「ほんとう」って？」をテーマにエッセイ形式で書いてください。【800字以内】 本コンテストの詳細については、大学ホームページをご確認ください。	受賞発表	受賞作品は、11月中旬に大谷大学ホームページにて公表し、後日全文を掲載します。 なお、応募作品は返却しません。また応募作品の著作権はすべて大谷大学に帰属します。
応募部門	高校生部門・中学生部門		
応募方法	①パソコンでの印字、または手書き ②チラシの裏面、または大学ホームページよりダウンロードできる応募用紙に必要事項を記載して、右記応募先までお送りください。		
応募先 問合せ先	【郵送】〒603-8143 京都市北区小山上総町 大谷大学 高大連携推進室(企画課)「親鸞エッセイコンテスト」係 【TEL】075-411-8350【FAX】075-411-8149【メール】renkei@sec.otani.ac.jp (月～金 9:00～17:00 祝日、大学で定める休日を除く)		

協力・協賛・後援

【協力】真宗大谷派(東本願寺)、真宗大谷派学校連合会、九州大谷短期大学

【協賛】中外日報社、文化時報社 【後援】京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会

大学ホームページ

<http://www.otani.ac.jp/shinran18>



Be Real 大谷大学
寄りそう知性



【高校生部門】

最優秀賞

大谷高等学校 第1学年

神田 綾菜

今日の夕飯は何を作ろうかな。昼の3時を過ぎると自然に頭の中で考える。うちは共働きで、姉が就職をして今年の4月に家を出るまでの間、姉が家にいる時はいつも夕飯を作っていた。それが特別な事とは思わなかった。だから姉が4月に家を出て行ってからは、私が家にいる時は夕飯を作る日が多くなった。自然な流れだった。ある日の夕飯に豚の生姜焼きを作った。醤油を入れすぎてしょっぱくなってしまった。分かってはいたが、兄は「しょっぱい。」と言った。父も「ちょっと味が濃いな。」と言った。だが母だけはいつもと変わらず、「おいしい。有難う。」と残さず料理を食べてくれた。私の心は複雑だった。おいしいご飯を作って皆に喜んでほしかったのに失敗してしまったというがっかりした思いと、前はおいしく作れたのにという悔しい思い。明日はリベンジだ…と心の中でつぶやいた。次の日は茶碗蒸しを作った。人参は型抜きをして花の形にした。ほうれん草と鶏肉も入れて、今回はちゃんと味見をして作った。家族はみんな「おいしい。」と言って食べてくれた。母は今日も「おいしい。有難う。綾は料理が上手だね。」と褒めてくれた。そして「次の休みは一緒にご飯を作ろう。」と言った。私は黙って頷いた。私は胸が熱くなった。それは料理が上手くできて褒められたからではない。いつも料理を作っていた私は少し頑張りすぎていたのだ。姉の代わりになるんだと大人ぶって背伸びしていたのかもしれない。本当の私は母の作った料理を「おいしい。」とただ食べたかったのだ。今週末は母とキッチンに立って料理を作る。何を作ろうかな…と料理のレシピ本を読みながら私は気付いた。凝った料理は作らないが、きっといつもの倍おいしい料理が出来ると思う。本当の私は母と一緒に夕飯が作りたかったのだ。



【高校生部門】

優秀賞

徳島市立高等学校 第1学年

岡本 舞

この時間帯にこの場所にいるなんて、いつ以来だろう。当たり前のように机に向かい、時を忘れるほど集中していたほんとうの私は過去にしかいない。久しぶりに河川敷へ足を運んだ。以前は毎日通っていた。好きな曲を聴き、時には自然の音を聴きながらひたすら歩いていた。その行動には何の意味があったのか。ただただ不安な気持ちを消したくて、ほんとうの私を探しにひたすら歩き回っていたのだろう。そうして辿り着いた場所。



歩き回っている間に日常のことにはじまり、普段深く考えることがなかったものにまで思索を巡らせた。考えがだんだんまとまっていく。上手く言葉に出来ないけれど、その時間を通せばどんな悩みも解決できていた。水面を眺めている間に感情も凧いでいった。他人には見せられない涙もその場でならば流せた。



感情を浄化できほんとうの私になれた場所。他の人にとって何でもない河川敷が支えになっていた。いつもと変わらないということが安心感を与えてくれた。人間はあまりにも簡単に変わってしまう。それが嫌で変わらないものに頼ろうとしていたのかもしれない。ほんとうの私を唯一受け止めてくれる場所。

どれほどの感情を川に浮かべたことだろう。時間は沢山あった。浮かんでは消えていく感情を素直に受け止めてもらえた。ただ、唯一心の底に凝り固まったものだけは消せないまま。それが手枷足枷となって動きを止めてくる。今日までも蓋を被せた状態で過ごしている。仮面を抱えている自分に嫌気がさす。

台風があった翌日、数ヶ月ぶりにあの場所を訪れた。増水していたり、水が濁っていたりしたが雰囲気は変わっていない。そのことでとても安心した。全てが変わってしまったと思いついでいたのに、変わらないものがこんな近くに残っていた。

自分の居場所を再発見できた気がした。帰る頃には少し気持ちが楽になっていた。あの頃と同じようにほんとうの私を曝せた。





【高校生部門】

優秀賞

藤枝明誠高等学校 第1学年



神谷 椿



太宰治の「葉桜と魔笛」は三人の親子の嘘と真実の物語である。最初は病で余命僅かな妹のために姉が嘘をつく。妹は嘘を見抜いてしまう。でもそこに怒りはなく、切なさや温かさがあるだけだ。小説の本文では、父親が嘘をついたことは明記されていない。しかし、そうであったとすれば、一つの嘘を、嘘と分かっているながら三人が静かに守っていたということになる。嘘と聞くとあまり良いイメージがないが、この物語の嘘は登場人物の優しさから生まれたものである。だから嘘がばれてしまうことはあまり問題ではない。大切なのは誰かのために一生懸命嘘をつく、という事実であると私は思う。もしそれが嘘であったとしても、嘘をついて嘘をつかれた事実が三人の真実になったのだと感じた。

私達は普段の生活で時々嘘をつく。そのうち、他人のためについた嘘はどれくらいあるのだろう。嘘にあまり良いイメージがないのは、自分のためにつく嘘がほとんどだからではないだろうか。他人のためにつく嘘は己の責任と苦しさを要する。自分のためにつく嘘は本当の自分を隠すためのもので、他人を傷つけると同時に自分も傷つける。だから本当の自分には近づけない。

もちろん、嘘をつかないのが一番だ。最初から本当のことを言えるなら、それでいい。本当を伝えることが優しさになることもたくさんある。ただ大事なものは、それが嘘であろうと本当のことであろうと相手を思いやっての言動なのかどうかだと思ふ。自分だけを守るためにしたことなのか、他人のためにしたことなのかどうかだ。そのどちらを選択するかによって、本当かどうかが決まると思う。

事実を真実に近づけるためには、自分に嘘をつかず相手のことを思いやる必要がある。これから本当の自分が嫌になったり、分からなくなったりしたときには、人に優しくなってみたい。





【高校生部門】

中外日報社賞



大谷高等学校 第2学年

中 森 まりあ

「ほんとう」とは何か。今の私は「ほんとう」の私なのだろうか。きっと周りから見た私は「ほんとう」の私だと思う。しかし、私自身は今の私を「ほんとう」の私と認めることはできない。

それは周りから見た私はいつも元気で勉強しなくてもテストで点数がとれて適当に過ごしているその姿を「ほんとう」の私だと認識されているからだ。だが、実際の私はそうではない。浮くのが嫌だから笑顔で元気に振るまい、テスト前は一日何時間も寝る時間を削り勉強し、考えている事を言えば雰囲気がかわれてしまうから言えないでいるただただ強がって怖くて「ほんとう」の私を見せられないでいるだけなのだ。学校の友達も「ほんとう」の私がこんな文章を書くとは思わないだろう。そのことが私が周りに「ほんとう」の自分を見せられていないことを感じさせているだろう。別に周りも「ほんとう」の私を知りたい、見たいとは思わないだろうと考えるが私自身も周りに「ほんとう」の私を見てほしい、見せたいと考えているのである。なぜなら「ほんとう」の私を見せられずに過ごすことは苦しくしんどい。また、「ほんとう」の私を認めてもらいたいと思っている。でも実際には強がりでも人に弱さを見せたくないため「ほんとう」の自分をいまだに見せられないでいるのだ。

だが、私はこれを書いたことをきっかけに「ほんとう」の私を見せていこうと思う。それは弱いところも含めてだ。それは良くも悪くも何かが変わってしまうかもしれないが、変わらないよりはきっと自分のためになるし、今の「ほんとう」よりもずっと満足いく「ほんとう」が見えてくることだろうと思う。そして私は周りの人も出来事も全てが「ほんとう」だったらどれだけの苦しみと喜びを得ることのできる世界になるのだろうかと考え、もしも叶うなら「ほんとう」は苦しみより喜びが多い世界だったらなと願う。





【高校生部門】

奨励賞

飯田女子高等学校 第2学年

矢澤 瞳

私は保育園の時からピアノを習ってます。今まで、どんなに忙しくても辞めたいと思ったことはありません。どうしてそんなにやり続けたいのか分かりませんでした。しかし、ある時私が惹き付けられるピアノの魅力に気づきました。それは、先生のある一言からでした。

「辛い時こそいい演奏ができる。」

この言葉を言われた時は意味が全然分かりませんでした。今までも先生には、「演奏には演奏する人の性格や感情がそのままです。」ということは何度も言われてきました。なので、なおさらなぜ、辛い時こそいい演奏ができるのか理解できませんでした。辛い時や悲しい時、ピアノを弾いていると感情が込み上げてきて涙を流しながら家で弾くこともありました。泣きながら弾く演奏なんていい演奏のはずがない。そう思いました。しかし、それは間違っていました。

練習していた曲が仕上げの段階に入り、強弱をつけていく練習をしていた時、気付かされました。その時練習していた曲は悲しい場面と幸せな場面とが曲の中で移り変わる難しい曲でした。今までは、強弱の変化を出す時、こういう場面じゃないかなと先生のイメージを聞かないと想像出来なかったのが、色々経験した今の私は実際あの時感じていた感情を思い出すことが出来たのです。なので、自分が経験した辛いや悲しいという気持ちをピアノを使って表現することが出来たのです。すると、あの時は辛くてどうしようもなかった気持ちにさえ、この感情を感じさせてくれたからこそ演奏できたという辛い過去にありがとうと思えたのです。また、聞いている人に気持ちが伝わる本当の演奏がその時できたように思いました。ピアノは音を間違えずに弾くことが完璧だと思っていましたが、私が思う本当の演奏とは、今まで私に感じさせてくれた感情をピアノにのせて音にして聞いている人、そして自分の心に届けられることだと思いました。





【高校生部門】
奨励賞

北海道札幌南高等学校 第2学年

清水 将也

「あと数時間で携帯が使えなくなります。」

「これから水道が止まるそうです」「電気の復旧には数日かかると聞きました」

9月5日未明、北海道を襲った大地震。停電や断水、食糧難など、それまで経験したことのない出来事が、立て続けに起こる中、溢れたのは誤情報、言い換えるなら、「本当でない」情報だった。

大変難しいことのように思う。情報の正誤は別として、まず情報を広めよう、という一人一人の意志は、「正しい」ものだ。被災して困っている人に、情報を届けたい。情報を届けることで少しでも誰かの力になりたい。あの様な非常時において、誰かのために思っただけで行動できることは、素晴らしいことだと思う。

しかしその行いによる「本当」であるはずの情報が、結果的に「本当でなかった」のが今回のケースだ。僕のもとにも、冒頭に書いたような、あたかも「本当っぽく」書かれた誤情報が沢山送られてきた。生活が復旧した今なら、回ってきた情報を一度冷静に吟味することができるが、先の見えない非常時に、情報の正誤を判断することは、容易な作業ではない。僕の友人はもちろん、大人たちまでもが、氾濫する誤情報に振り回され、不用意に心を焦らせていた。SNSの発達に伴う、情報発信の気軽さが、悪意のない「本当でない」情報を拡散させてしまったのだ。

自分はその時、どうすれば良かったのか。何をすれば「本当の」情報かどうか見極められたのか。それは、あの時の自分を振り返っても、解決できない問題だ。情報の溢れる今の世の中で生活する以上、結局は、日頃から、情報の正誤をよく考える習慣を持つしか、問題の解決策はないのだから。

「ほんとうって、何だろう。」その答えは、日常生活の中で、正しい判断力を養うことで初めて、目に見えてくるものなんだと、先の震災を経て僕は、そんな風に思った。



【中学生部門】

最優秀賞

大谷中学校 第2学年

藤井 咲子

「ほんとうにそれでいいの？」



この言葉を何回言われてきただろう。たぶん、何百回何千回、と言われてきたと思う。

私はバレエを習っている。夢は、ヨーロッパでプロのバレリーナとして活躍することだ。そのために、ほぼ毎日、厳しいレッスンを受ける。上手くなるためには、練習するしかない。しかも、「正しい」練習を積み重ねなければならない。だから、先生方は「ほんとうにそれでいいの?」「もっと正しいポジションでやりなさい」などと繰り返し指導して下さるし、自分でも考えながら練習している。

でも、バレエには「完璧」なんてないのだ。一つ一つのポーズや動きは、こうしなければならないということが決められているが、そこに「完璧」はない。プロのバレリーナになっても、世界のトップレベルにいるダンサーでも、日々自分の身体と向き合い、「もっと美しくできる」「まだ上のレベルに行ける」などと考え、もっと上手くなろうとする。

バレエには完成はない。でも、上手くなるにはひたすら完璧を追い求めていくしかない。だから、「ほんとうにそれでいいの?」と自分を見つめ続ける。いくら「ほんとう?」と問い続けても、ほんとうのゴールにはたどり着けないけど、「ほんとう」を追い求めていくしかないのだ。私は、このことはバレエだけでなく、生活の中でもあてはまると思う。腹が立つときでも、幸せなときでも、気づけば「ほんとうにこのままでいい?」と思うはずだ。私たちは、自分に「ほんとう?」と問うことで変わろうとするのかもしれない。きっと、「ほんとう」というゴールは存在しないのだと私は思う。「ほんとう」は、永遠に追い求めていくものではないだろうか。

私は夢を叶えたい。だから、「ほんとう」を追い求めて努力することをやめないで、生きていきたい。



【中学生部門】

優秀賞

大津市立瀬田北中学校 第2学年



佐藤 瑠乃

「ほんとう」とはなにか。私は「ほんとう」とは信じられる心だと思う。

では今の私達の生活は、「ほんとう」に近いところにあるだろうか。私は、実は非常に遠いところにあるのではないかと思っている。「ほんとう」を考えると、私は文字の恐ろしさについて考える。文字とは切り取られた断片的な情報であり、それは「ほんとう」とは遠いところにあると思う。そこにはぬくもりも、優しさも、思いやりも誤った形で感じ取ることがあり、人間にとって一番大切なものが伝えきれないと思うからだ。なのに私達は、日々文字という情報に振り回されている。例えば「愛」という言葉。この一見美しく思える言葉は、時として私達に誤った情報を与える場合がある。盲目的な独りよがりの感情や、性的な衝動も「愛」という言葉に置き換えられる危険性があるからだ。

ある時私は、文字に支配される恐ろしい体験をした。私以外の誰一人として、その恐ろしさに気づいていなかった。それは学校のキャンプでの出来事だった。就寝前、私はその日の出来事を、みんなで談笑するのを楽しみにしていた。しかし私の期待は無残にも打ち砕かれた。周りを見回すと、私以外の全員がスマートフォンでメールやラインをしているのだ。私はあなたの目の前にいる私を見てと、叫びそうになった。目の前にいる私が「ほんとう」なのに、みんな目の前に書かれている文字のなかに「ほんとう」を探そうとしている。とても悲しく、また背筋にぞっと寒いものを感じた。

私達が「ほんとう」を探すには、文字に操られる日々を捨てなければならない。実際に自分の目、耳、心で「ほんとう」を感じ取る力を身につけることが必要だ。その力が生きるということだ。人生は「ほんとう」を探し続ける旅だと思う。そしてその先の最終地点に私達は、信じられる心にたどり着けるのだと私は思う。



【中学生部門】

文化時報社賞

大谷中学校 第1学年

宇都宮 杏香

「ほんとう」って何だろう。



「ほんとう」があるということは、「うそ」「間違い」「にせもの」など、逆の意味のものが存在するという事。その逆の意味の存在も「ほんとう」の事だ。などと考えていくと「ほんとう」というものには、色々な意味があって、何だか訳が分からなくなってしまった。そこで、私の身近な環境で「ほんとう」を考えてみた。

私の家族は父、母、兄、私の四人家族。父は私達の生活を守る為、一生懸命働いてくれている。でも「ほんとう」はゆっくり休みたいと思っているのかもしれない。家事をしてくれている母は料理が苦手な、面倒くさがり屋だ。「ほんとう」は、もっと自分の為だけにのんびり過ごしたいのかもしれない。勉強嫌いな兄は、なかなか机に向かわず、よく父母に叱られている。「ほんとう」は、もっと遊びたいし、もっと自由に生活を送りたいそう。

私はどうだろう。「ほんとう」は、もっと寝ていたいけど、学校へ行くため早く起き、「ほんとう」は面倒と思う課題もテスト勉強も我慢してやっている。みんな「ほんとう」はしたくなくても、その「ほんとう」の気持ちを隠して、生活している気がする。まるで「うそ」の生活みたいだ。

しかし、「ほんとう」にやりたいことだけをやっていくと、家族生活は成り立たなくなると思う。「ほんとう」の気持ちを少し抑えることで、「家族のために」「誰かのために」といった思いやりの気持ちが生まれるのかもしれない。そう考えると、私の身近な環境は、優しさに包まれた環境だということに気づく。家族に対し、感謝の気持ちがわいてくる。

「ほんとう」の裏に隠れた、「ほんとう」の気持ちを感じ取れる人に私はなれるだろうか。



【中学生部門】

奨励賞

札幌大谷中学校 第2学年

城 寶 彩 乃

私は生まれて言葉が話せる様になってから、何気なく「ほんとう」という言葉を使って来ていました。今回改めて「ほんとう」という言葉について深く考えました。その中で、私は、二つの「ほんとう」を見つけました。一つ目は、「ほんとう」か、「ほんとうではない」かを自分ではっきり答えが出てくる「ほんとう」です。例えば、何かの試験を受けて、判定を受けた時などは合格、不合格という目に見える事実として「ほんとう」が自分自身でわかります。合格だと、「嬉しい、気分が良い」不合格だと「悲しい、落ち込む」という感情が「ほんとう」にプラスされると思います。二つ目は、相手と自分の関係の中ではっきりとした答えが出るまでに時間がかかったり、答えが出ないこともある「ほんとう」です。例えば、自分は仲良しだと思っていつも接している友達が実は自分のことが苦手なのに我慢して接してくれていた時、相手の心の中が見えないので相手の「ほんとう」がわからなかったりします。相手が自分に対して、「ほんとう」の気持ちを打ち明けて来た時に私は、傷つき、つらい思いをするかもしれません。ですが、それが「ほんとう」なので受け入れなければなりません。

以前、友達が「いじめ」にあっていました。私は詳しいことはよくわかりませんでしたが、「大丈夫？」と声をかけていました。友達はいつも「大丈夫だよ。」と答えてくれましたが、ある日、この「いじめ」についてクラスで話し合われた時、友達が「バイ菌扱いされてつらかった。」とみんなの前で泣きながら話してくれました。この時、私は、「ほんとう」の気持ちを聞き、助けてあげたかったと後悔しました。「ほんとう」には、たくさんの場合があり、その「ほんとう」をみきわめるのは大切だと思います。自分や相手の気持ち、行動を感じ取る人になることで、「ほんとう」という言葉の理解をできるのではないかと思います。

